綜合的統一について

三宅剛一

一

何等かの全體が考へられるとき、それが統一として考へられなければならぬのは云ふまでもない。しかし全體は無内容な統一ではない。そこには統一される多樣なるものがなければならぬ。卽ちその統一は多樣なるものを綜合する統一でなければならぬ。この綜合的統一をいかなるものと見るかに從つて全體が種々の意味を得て來るのである。綜合的統一の問題はカント以後の哲學に於て中心的な位置を占めるものであるが、この問題の解決のうちにその哲學の體系的意義を窺ふことが出來ると思ふ。この問題について考へるにはカント及びカントに續く大きな體系を論ずるのが最も有意義であらうが、こゝで私の試みやうとするのはそれではない。私はたゞリッケルトの哲學體系の一卷に於けるこの問題の取扱ひ方について、

考へさせられたことを述べて、この問題の一端に觸れてみやうと云ふにすぎぬ。

リッケルトによれば、哲學は全體を對象とする學であるが、その全體は思惟し得るものでなければならぬ。從つて無差別な統一ではあり得ない。絕對に無差別的なものは思惟することが出來ないからである。しかしまた、相對論者の云ふやうに、すべて思惟し得るものは相對的なものであつて、絕體は思惟の對象たり得ないと考へるのも誤つてゐる。差別或は多樣性と絕對或は全體とは相容れないものではない。相對論者は、ものを關係的に考へるのであるが、あるものが他のものと關係にたつたと云ふ場合、その所謂他のものが、すべての他である限りその關係の兩項を合せたものは絕對に外ならぬ、相對論は關係論（ヒラチヨナリスムス）によつて止揚せられる。（Rickert. System I. S. 44）

全體を相對的なものゝ關係的な結合として、或は對立的なものゝ雙關的結合として、理解しようとするのがリッケルトの根本思想であるらしく思はれる。彼の哲學體系の骨子をなしてゐると云つてもいいところの Heterologie の原理はかゝる意味をもつてゐると思はれる。それについて少し述べてみよう。

リッケルトによれば、我々の思惟し得べき最も單純な對象も必ず二つの要素の結合したものである。思惟されるもの、卽ち內容と、思惟の形式とがそれである。ある

内容が思惟の對象として成立するためには、それは「一のもの」と云ふ形式(die Form des Einen)をもたねばならぬ。形式なき内容、及び内容なき形式を思惟することは不可能である。形式と内容とは對象のモメントであつて獨立の對象ではない。對象は必ず形式と内容との結合である。而して之を結合するものは形式内容に對して更に第三のモメントをなす。形式を一者(ダスアイネ)とすれば内容は他者であつて、對象は一と他との綜合的統一である。何等特殊の内容なき純論理的對象も三つのモメンテから成るものであつて、對象的規定の Minimum は das Eine und das Andere である。こゝに und は綜合のモメントを現はすものであるが、その綜合は分れたるものゝ結合と云ふ以上に何等の規定なき純論理的關係を現はす。この三要素はすべての對象成立に缺くべからざるものであり、而もその一々を孤立的にとれば未だ獨立の對象をなさぬと云ふ意味でこれを Vorgegenstand とも呼んでゐる。

これらのことは特に誌すまでもなく、既によく知られたことであらうが、この純論理的對象或は理論的對象一般の規定のしかたのうちに、リッケルトの意味する綜合的統一の特質が現はれてゐると思ふ。まづ一と他とは同樣に積極的根本的のものであつて、その間に論理的な先後の順序をおくべきものではない。他者は一者の否定

ではない。Andersheit は論理的には否定に先行すると云ふ。これは論理的なるものゝ本質は思惟作用にあるのではなく、思惟される對象の性質に存すると云ふ思想に基くのである。次に對立する二要素を綜合統一するものが、二者をその中に包み、或はその統一が兩者の內面に浸透するのではなく、またその何れか一方に屬する作用でもなく兩者と同列なる第三の要素であつて、それは對立するものゝ間の關係であり、兩者結合の Band 或は Medium であると考へられてゐる。統一は差別に於ける統一であつて結合すると共に分離せしめる、兩項は分離したままで結合される。一と他が必然的に相求め相補ふと云ふ點で雙關的であるが、その Korrelation の意味はリッケルトに於ては特有なものをもつてゐるのである。

リッケルトの哲學には幾つかの根本的な對立が現はれてゐる。一と他、形式と內容、作用と對象、主觀と客觀、價値と實在等がそれである。これ等の對立は全體としての世界に於ては何等かの形で綜合統一されてゐなければならぬ。彼はその統一をいかに考へてゐるか。これ等の對立のうちで彼が最も立ち入つて論じてゐるものゝ一つは形式と內容のそれである、一般性と云ふ上から云へば一他の對立が更に根本的であつて、形式內容の對立はそれの特殊な一例であると云へやうが、一他の對立

はあまりに無性格であつて問題の核心に觸れるに適しない。それで私は形式と內容との綜合統一がリッケルトに於ていかに考へられてゐるかを見ることによつて彼の全體なるものが如何なる意味のものであるかを考へてみやうと思ふ。

二

對象は理論的(テオレティッシュ)であるかぎり單なる內容ではなく、內容を理論的な對象たらしめる形式をもたねばならぬ。對象に於けるこの形式と內容との結合をいかに見るべきであるか。

リッケルトは「認識の對象」の三版でこの問題を詳しく論じてゐる。對象に於ける形式內容の結合(ツーザンメン)を規定するに客觀的論理學(主としてラスクをさす)は認識主觀と無關係に二要素の直接の結合として考へる。それで形式が內容をもつ、內容が形式の中にある、或は形式が內容をつつむ(ウムシュリーセン)などと云はれる。かやうに考へれば形成せられた內容は認識せられることなくしてそれ自身を維持するもの、卽ち主觀と無關係に「存在」するものとならざるを得ない。これは批判前期の獨斷的實體論に墮するものであつて、かゝる對象は理論的對象と稱し難いものである。何となれば對象は理論

的と云ひ得るかぎり之に對應する理論的主觀なしにあることは不可能であるからである。而して對象を認識主觀に關係せしめるかぎり形式內容のZusammenは超越的に妥當な相屬Zusammengehörigkeitであつて、認識主觀に對し承認さるべき當爲として對立するものとならざるを得ない。斯してはじめて主觀によつて認識することの可能なる對象となるのである。認識主觀が判斷によつて肯定するとの出來る對象に於ては、形式と內容の關係は必ず相屬として現はれる。(Gegenstand der Erkenntnis. 3te Aufl. S. 286)

形式と內容との相屬が主觀の判斷作用によつて承認せられるや、形式と內容とは相屬の關係を脫して全體としての統一的な對象に結合せられる。當爲的に相屬する形式と內容とは主觀の作用を通して結合する。この意味で主觀の作用は對象を生產(プロズチーレン)する。と云ひ得る。主觀の作用は形式及び內容そのものに何物をも加へるのではない。「我々に對立する形式と內容との相屬に向つては我々は依存的である。この相屬は超越的非實在的「對象」としてあらゆる判斷意味に論理的に先行する。しかし我々が當爲を承認し、それによつて、實在するものを認識することにより、內容はそれに屬(ツーコンメン)する形式を得て「實在する對象」となる。實在性の形式をもつと云はれる既成

の對象は形式を賦與するところの承認作用によつてはじめて成立する」(S. 369) また「內容を實在するものとして是認する判斷意識一般について「判斷主觀はその承認によつて、世界の二つの分離せる王國卽ち內在的客觀の實在と超越的價値の非實在とを一の完結した全體に結合する」(S. 327) とも云つてゐる。

形式と內容との相屬の關係から兩者の統一的全體としての理論的對象への推移が主觀の作用によつて媒介せられると云ふことが果して可能であらうか。リッケルトはその所謂承認作用はレアルな過程ではなく、對象成立の認識論的に必然な豫定として構成せられた概念であつて、それが當爲の是認であると云ふのも作用の意義の上からの規定であると云ふが、我々もまたそれを認める。問題は形式、內容及び承認作用に、それぞれ、リッケルトの與へる如き意味を與へた場合に、それによつて對象の統一が理解出來るかと云ふことである。

形式と內容とが相屬の關係にたつと云ふとき、リッケルトの意味してゐる形式は純論理的對象に於て見られる形式のミニマムではなく、すでに何等かの特殊化をもつた形式だと見なければならぬ。ところで、純論理的對象に於いて見られる以上の形式の特殊性は內容から來るものでなければならぬ。それであるからある特殊な

形式、例へば實在性とか因果とかの形式が成立するためには、內容と形式とはすでに何等かの意味で統一されてゐなければならぬのではないか。さもなければ形式の特殊化はどこから來るのであるか不可解ではないか。相屬と云ふ關係が可能であるためには、ある形式はそれに屬する內容を有しある內容にはそれに屬する形式が成立してゐると見なければならぬ。かやうなことは形式と內容とを綜合する統一を豫想してゐるのでなければ不可能ではないか。而してその統一は形式と內容との相屬に先だつ可きであるから、主觀の承認作用を俟つてはじめて成立するものでは勿論あり得ない。リッケルトはこの形式の分化を論ずることは完成せる先驗哲學の任務であるとして、それに立ち入らないことを斷つてゐるが、(S. 395) そこに一の問題が存するのではないか。それは範疇の體系など云ふことでなく、先驗的形式の可能に關する問題を含んでゐるのではあるまいか。彼は無造作に知覺せられた內容と實在性又は因果の形との當爲的相屬を說いてゐるが、これ等の形式そのものは如何にして成立するのであるか。彼が云ふ樣に(恐らくたゞ例證としてゞあらうが)現實的實存の判斷を分析して、所謂形式の過剩 Ueber chuss an Formgehalt を純粹內容から抽象することによつて得やうとするのであれば、(S. 396) 唯だに、嚴密な先驗

性が認められないのみならず、形式内容の根本的な綜合統一は明かに豫定せられてゐると見なければならぬ。かゝる直接の結合を反省的に分析し、更に當爲的に結合するところにコスモスとしての理論的世界が成り立つのであると云ふかも知らないが、既に分化したる形式をもつやうな世界は、リッケルトの云ふやうな混沌たる直接的統一の世界と云ひ得ないのみならず、かやうに形成せられた所與を認めることは先驗的立場と相容れないと云はねばならぬ。リッケルトは價値論としての純粹論理學は超越的意味の價値形式を研究すべきものであつて、その形式がすべての存在に關する眞なる文章のアプリオリでなければならぬと云ひ、その形式の最著しいものとして Sein, Wirklichkeit などをあげてゐる。(S. 274) しかし純粹論理學はどこからこれ等の形式を得て來るのであらう。田邊博士もこの問題に論及して、主として形式の内在化、内容との適應の可能と云ふ方面から、リッケルトを難じてゐられる。(認識主觀の問題、三、五)所與性の範疇の如く形式自身の Gehalt として何等の特殊性をもゝたないものは別とするも、すでに特殊な Gehalt を有する形式については、それの先驗的妥當性を示すためには内容をも包含する綜合的原理からの演繹を必要とするのではないか。それが單なる目的論的演繹であつていゝかどうかは問題である

と思ふ。田邊博士の説の如く所與性の範疇以外の形式は既に方法論的意義をもつのであるとするならば、その時に於てはじめて有効なる目的論的演繹があり得るであらう。

いづれにしても、既に分化せられた形式があり、形式と内容との間に相屬の關係が成立し得るためには、それに先だつて、形式内容の綜合的統一は何等かの形で成立してゐると見なければならない。從つて相屬と云ふのは反省によつて分離せられた原統一の要素の間に成り立つ關係とする外はない。その相屬性に超越的當爲が伴ふと云ふのは要素の分離を通して、保たれた原統一の現はれであるとも考へられるが、しかしそれは原統一の何であるかを明瞭にしないかぎり、單なる想定に止まる。それはいづれにもせよ、かく分離せられた要素が、主觀の承認作用によつて一の統一的全體に結合され得るであらうか。承認作用は形式及び内容そのものに何等の變更をもゝたらすことなしに、たゞそれの結合のみを「生ずる」と云ふのであるが、要素を變ずることなくして之を結合すると云ふことは、この場合、その要素間に何等かの關係を設けることより以外にはあり得ない。而してその關係は要素そのものに對して無力なる主觀によつて與へられたものであるから一の外面的關係にすぎぬ。從つ

てそこに成立する全體は外面的に結合せられた主觀的全體でなければならぬ。卽ち眞の綜合的統一ではない。それで結局承認作用を經た形式と內容との關係は相屬のまゝに止まるか、或は何かの新しきものが加はるとすれば、それはたゞ主觀的な關係にすぎぬと云ふことゝなるであらう。

この結論を免れるには二つの途があると思ふ。一つは主觀の承認作用を單に既成の對象把捉の手段にすぎないとするのである。かやうに見ればその主觀は經驗的主觀とならなければならぬ。いま一つには主觀の作用を對象の成立に干與せしめるのであるが、それがためには主觀の作用は固定的な形式と內容との結合の媒介に止まるものであつてはならぬ。この作用がいかなるものであるかはこゝで明かにすることは出來ないが、上に論じて來たことによつて次のやうなことだけは推定出來ると思ふ。もしこの作用が綜合の作用と云ひ得るなら、その綜合は固定した要素の單なる綜合ではなくその綜合によつて要素を變ずるもの或は內容と云はる可きものをはじめて生ずるものでなければならぬ。勿論變ずるとか生ずるとかと云ふのは實質的にではなく意味的對象としてのことである。しかしそれもたゞ一の可能に止まる。上に述べたことによつては更してかゝる作用がなければならぬか、

またありとすればいかなる性質のものであるかは示されてゐない。

三

形式及び內容そのものを主觀の支配外におきながら、その結合のみに主觀の干與を認めようと云ふのは支持し難い立場であることが解つた。それで更に一歩を進めて全然主觀の作用を顧慮することなしに、形式と內容との結合を規定しようと云ふ試みが起るわけである。リッケルト、の客觀論理的と云つてゐる立場である。かやうな立場から形式と內容との結合を論じてゐるものとしてラスクの說をとつて考へてみよう。

ラスクによれば形式と內容とが直接の結合をなさずその間に相屬不相屬と云ふ如き「關係」が成り立つと云ふことは、所謂形式及び內容が未だ眞の對象構成の要素でないからである。形式はすでにある他のものに向つたもの、(hinweisend) 他のものとの關係を含んだものである。質料(マテリアル)(內容)と云ふのも同樣にある關係對象構造に於ける位置をその中に含んでゐる。形式と質料とは既にその中にある原本的關係 Urverhältniss をもちこんだ (mit hineingenommen) ものである。從つてその形式たり質料た

ることに於て、すでに含まれてゐる原的な關係を無視して、その間に更に新たなる關係を設けようとするのは無意味な過剰である。(Lask. Logik der Philosophie. S. 175 Die Lehre vom Urteil S. 101)對象を構成する眞の關係は、未だ形式と名くべからざるあるものと、質料以前のあるものとの間に成立する。形式以前のあるものとは未だ質料に向はない妥當的なるものであつて、質料以前のあるものとは、未だ妥當的なるものによつて觸れられない純感性的なものである。これが眞の項(die wahren Urglieder)である。この兩者が形式となり質料となるときすでに元の關係を擔ひこんでゐるのであつて、形式、質料はすでに眞の項そのものではない。これは一般的に形式質料そのものとして云はれるのであるが、形式一般が更に分化した特殊の範疇的形式に於ては更に特定な質料への關係が現はれてゐる。形式の有する定性をラスクは Formgehalt 又は Bedeutungsbestimmtheit と名けてゐるが、形式にかゝる定性を與へるものは質料の特殊性である。この形式を限定する質料的特性を意義規定的契機 (bedeutungsbestimmendes Moment) と名けてゐるがそれは感性的なるものゝ一群に共通なる特質(Gruppenbestimmtheit)である。それによつて幾つかの根本的な形式が定まるのである。形式一般が「物」の形式となるか因果の形式となるかは形式一般を意義的に規定する

感性的なるものゝ特性による。故に特定の形式にはすでに對項たる質料への一定した關係が含まれてゐる、否特定の範疇とは形式一般の特定の質料への關係（Bezoge h it zu einem bes immte. Material）そのものに外ならない。從つて特定の形式と質料との間に更に調和又は不調和と云ふ如き關係を設けようとするのは無意味である。それらの關係は形式と質料との分離及び相互の可動性（フェルシィブバルカイト）を豫想してゐるものであつて作爲的なるものにすぎない。それはすでに對象の原的構造の弛緩を示す現象である。

ラスクはかやうな考から判斷と對象との關係を論じてゐるのであるが、いまの問題に關係をもつのは彼の對象の原的構造と云つてゐるものである。形式と內容との結合した全體が對象或は意味（ジン）である。ラスクは對象を相對立するもの、卽ち妥當的なるもの（形式）と感性的なるもの（質料）との直接の結合として考へようとしてゐる。彼によれば妥當するものはそれ自身に休へる世界をなすものでなく、常に非妥當的なるもの、自己の外（フレムド）なるものに向ひゆく（hingelten）ものである。それは實質的充實を俟つところの非獨立的なものである。妥當は常に何物かについての妥當（ein Gel en betreffs, ein Gelten hinsichtlich, ein Hingelten）である。（Logik d. Ph. S. 31）彼はそれを妥當

的なるものゝ形式性とよんでゐるが、妥當的なるものはこの內面的不安定性に基いて必然的に自己以外の感性的非妥當的なるものに hingelten し、そこに對象卽ち意味の世界を形成する。意味は妥當的なるものと非妥當的なるものとの抱合である。妥當は內容ある妥當卽ち意味である限り、非妥當的なるものによつて荷づまれ(belastet)てゐる。妥當的なるものゝ本質はその向他的妥當性に存する。

妥當的形式と非妥當的質料とは對象に於ていかに結合してゐるか。ラスクは對象の原的構造に於ける形式內容の關係を現はすに形式と內容との Schlichtes Ineinander とか Schlichtes Stehen des Materials in der Kategorie とか或は Schlichte Aufeinanderangewiesenheit der Urbestandteile とか云ふやうな比喩的表現を用ひてゐる。この形式內容の關係は彼の所謂原的關係の現はれであるが、範疇と質料との結びつきそのものは、藝術的形式と素材との結びつきと同樣に、一の特異なる非論理的なあるもの ein ureigentliches Alogisches であつて、これを「形式と內容との關係」であると云ふのは、この特異なるあるものを論理的形式(こゝでは形式の形式)にあてはめて對象化するときに、はじめて與へられる意義的規定である。我々が範疇と質料との特異な結びつきを理論的反省の明るみに引き出して規定するとき、それが「形式と內容との關係」として現はれて來

るのである。これを「關係」と云ふ反省的範疇に屬する規定によつて現はす場合はその關係の特殊性は沒せられてゐる。この關係を構成的に規定すべき範疇が見出し得られたとするならば、それは妥當的なるものと非妥當的感性的なるものとの間の原的な關係を積極的に規定するものであつて、感性的なるもの相互の間に成立する範疇と比べ得ない、特に哲學的な性質のものでなければならぬ。この場合に比喩的な表現を用ひるのは特有な構成的なる哲學論理的な Gehalt に對する達しがたき憧憬の現はれであると云つてゐる。(Log. d. Ph. S. 180)

對象を構成する要素としての形式と內容とは統一に於てのみ相融合したものとしてのみ存立し得るもの、むしろ對象の全體的統一の兩面を抽象的にとり出してみたものにすぎないのではないかと云ふのはこゝに自然に起つて來る豫感である。しかしラスク自身の思想をこの豫感に引きつけることは困難なやうである。彼は形式と內容とに、相互の結合を離れた形に於てもある種の存立を許してゐる。形式と內容とは、それ〴〵異つた源泉が配せられる。こゝにラスクの二要素說 Zweielementen theorie の立場が成りたつ。形式の根元としては多樣を含まざる唯一純粹な妥當的なるものが考へられる。これに對して內容の根元としては意味とか妥當とかに全

く無關係な單に存在するのみなるもの、ただ消極的にしか特徴づけられない、無形態的なあるものがおかれる。これを感性的と呼ぶのは感性的が哲學的意義に於て非妥當的と同義と考へられるからである。かくして非感性的妥當的なるものと感性的非妥當的なるものとは思惟し得べきあらゆるものを構成する根本の二元(ウルドアリテート)である(なほこの外に超感性的超存在的な形而上學的領域があげられるが、ラスクはそれは感性的なものとは別な意味でやはり質料と見なしてゐる)

この終極的な二元の說に對しては我々のうちに種々の疑ひが起つて來る。たとへば、妥當的なものと非妥當的なものとに形式質料としての意義を與へる所謂 fun ktionelles Urverhältnis と離れて、獨立せる二樣の根元的存立を想定することはいかなる根據によるか。それは統一的全體のモメントにすぎないものゝ Hypostasierung ではないかと考へられる。この疑ひはラスクの認めてゐる二元間の原的關係の考察によつてある定まつた形をとつてくるやうに思はれる。

二要素間に一の關係が存すると云ふ場合、その關係が二要素そのものに屬するもので、單に之を關係せしめる意識によつて反省的に考へだされたものでないとするならば、その關係は何等かの積極的內容をもち、項に對して自己を維持することの出

來るものでなければならない。而して兩項の間に成りたつ關係が積極的であるためにはそれは項に對して何等かの影響を及ぼすものでなければならぬ、卽ちその關係にたゝない場合に比べて兩項に何等かの差異が起らねばならぬ。云ひかへれば關係が項そのものに於て何等かの發現をもたねばならぬ。二項の關係が第三者によつて認められるのでなく、云はゞ項そのものがこれを認めるのでなければならぬ。もしかやうな項自身のうちに於ける關係の現はれを否定するならば、その關係は項に於いて何であるかは不明となり、關係と項とは更に第三の關係を俟たなければ結びつかぬことゝなるのではあるまいか。項に於て發現をもつと云ふところに關係せしめる關係と考へられたる關係との區別が存すると云はねばならない。この考へを妥當者非妥當者間の關係に及ぼしたらどうなるであらう。妥當的なるものと非妥當的なるものとの關係が妥當的なるものに於て現はれると云ふことは、妥當的なるものゝうちに非妥當的なるものが姿を現はすこと、卽ち妥當的なるものが內容を得て特殊化せられる事でなければならない。また、非妥當的なるものに於て妥當的なるものとの關係が現はれると云ふことは、妥當的なものが非妥當的なるものに於て現はれ sich geltend machen すること、卽ち非妥當的なものゝ妥當化に外ならぬ。

而してこの兩項に於て現はれることが同一事象の二面であることは明かである。眞にあるところのものは形式と內容との綜合的全體としての妥當なる意味形象、卽ち對象の統一そのものである。要素がまづあつて對象を合成するのではなく、對象の統一に於て區別せられる二方面を孤立的に對象化したものが形式と內容である。かく形式內容が各別に引出されると云ふことは既に對象の統一の破壞であるから、所謂要素は對象の統一に先んじて存し得ぬのみならず、既に他の統一に屬するものなのである。もし形式と內容との關係と云ふことによつて、何事かゞ云はれてゐるとするならば、その當體はこの意味的全體の統一と云ふことでなければならぬ。

このやうな考察から、ラスクの所謂特に哲學的なるものが、全體の統一と云ふことを根底において、はじめて明かにせられるものであらうといふ豫想が益々强められる。一般に關係といふことが、全體の統一の反省的な或は一面的な規定としてゞなく、絕對的な意味をもち得るものであるかどうか自分には疑はしく思はれる。勿論全體の統一をもち出したのみで問題が解決されるとはいへない。その統一の性質を明かにしようとすれば何等かの要素とその間の關係とが考へられなければならないであらう。しかし全體のモメントとしての項或は關係と、それ自身として考へ

られたこれ等のものとが、意味に於て相異することは明かである。哲學に於てはそこに存する區別が重要であると云はなければならない。全體の統一が不可解であると云ふならば、獨立的二元とその間の原的な關係も不可解であると云はなければならぬ。否、後者に於ては根本的な事象に於て偶然的なるものが多く含まれるといふ點で一層不可解であるとも云へる。この小篇に於ては哲學的認識の方向と云ふやうなことを考へてみたいと思ふのであるから、この問題には後にまたかへつて來るつもりである。（未完）